NY エッセイ ⑤

中瀬 有紀



Grace Church：802 Broadway（at 10th Street）New York, NY

遠い地から日本を想う

東日本大震災はニューヨークでも非常に大きなニュースでした。日本時間の3月11日午後2時46分はニューヨークの同日午前0時46分でした。「日本で大きな地震があったようだけど、有紀の家族は無事か?」というアメリカ人の友達からのメールにより、地震発生の2時間後に震災を知りました。それから1週間、ニューヨークタイムズの1面は、毎日、日本の地震と津波による被害の状況を伝え、私は会う人ほぼ全員から、「震源地の東北とはどこか、東京と東北はどのくらい離れているのか、また有紀の家族は震源からどのくらい離れているのか?」と、尋ねられました。こんなにもたくさん日本について質問を受けたことは、未だかつてありません。地震発生から1ヶ月が過ぎた今も、"Pray for Japan"をキーワードに、ニューヨーカー達によるチャリティーイベントが数多く開催されています。

震災のようにたくさんの方の死と、残された家族の悲しみを目の当たりにしたとき、自分の存在と人生の意味について、もう一度考え直します。私は何のために存在し、何を社会に貢献したいと考え、そのためには何をするべきか。生きている私にとって、人生とは終わりの見えない時間です。もしかしたら明日、命が終わる可能性もある人間である以上、目標は短期でも長期でもなく、今やるべきことであり、Just do itです。

私が照明デザイナーという人生を選んだ理由の1つに、沖縄県平和記念資料館があります。国内唯一の陸上戦が行われた事実を伝える数多くの悲惨な写真の中に、1枚、舞台の写真がありました。少女が空き缶を使用した三線を手に、舞台で音楽を披露している戦後復興の写真でした。舞台芸術が栄える条件には、安定した社会と、舞台を価値あるものと見なす社会の目が必須ですが、照明デザインという仕事は、地球上で人間の営みがある限り、どのような状況でも誰かの役に立つ仕事であると、あのとき確信しました。光は、たとえランタン1台でも、被写体への距離、角度、質、色、そして動きにより、忘れられない光景を見せることができます。

東日本大震災、避難所でランタン1台に集う方々の笑顔を見て、再認識しました。